

東教育財団だより

発行所
公益財団法人
東教育財団
大阪市中央区南本町
2-2-11 堺筋本町
西尾ビル6階
電話06(6262)7363
発行責任者 長谷隆雄

頌春

本年もよろしく
お願い申し上げます



平成二九年度の 助成事業を 募集します

東教育財団では、中央区内の学校教育及び社会教育の育成、並びに、地域文化の振興に寄与するため、学校教育活動、社会教育・生涯学習活動、並びに、地域文化・まちづくり活動に助成を行っています。

平成二九年度の助成事業は、

三月一日(水)から募集を開始し、

三月十七日(金)に締め切ります。

ご応募をお待ちしています。

助成対象事業

① 学校教育事業助成

中央区内の学校教育の充実・発展に寄与し、且つ、当該校風の独自性や特色を持つ事業

(参考事例)

- ❖ 地域の歴史、伝統、文化、産業等に関する調査・学習事業
- ❖ 右記の調査・学習によって作成した冊子等の発行事業
- ❖ 外国人子女への日本語等指導事業
- ❖ 姉妹校交流(他文化交流・共生)事業

- ❖ 伝統芸能(文楽、能等)鑑賞、学習、発表事業
- ❖ 校内緑化等自然環境整備事業
- ❖ クラブ活動に必要な用具・資材の購入・貸与事業

- ❖ クラブ活動の地域交流事業(例:吹奏楽部が開催する地域コンサート)
- ❖ クラブ活動等における全国大会等への参加事業

- ❖ 学校周年記念事業(二〇周年を単位とする周年事業に限る)



「学校教育事業助成説明会」風景

② 社会教育・生涯学習事業助成

中央区内の社会教育や生涯学習の充実・発展に寄与する事業

③ 地域文化・まちづくり事業助成

中央区内の地域文化や東地区五地域のまちづくりの振興に寄与する事業

助成対象団体

① 学校教育事業助成

中央区内に所在する公立の幼稚園、小学校及び中学校

② 社会教育・生涯学習事業助成

社会教育・生涯学習の活動を行う社会教育団体及び生涯学習団体



「社会教育・生涯学習事業助成説明会」風景

③ 地域文化・まちづくり事業助成
 地域文化・まちづくり活動を行う
 団体



「地域文化・まちづくり事業助成説明会」風景

助成限度額

平成二九年度の運用収益が平成二八年度比で約六四〇万円の減となるので、平成二九年度助成事業に係る予算額は、平成二八年度予算額から概ね三割を減じた額の範囲で計上せざるを得ない。

したがって、平成二九年度助成額は、平成二八年度助成額から概ね三割を減じた額となるが、事業毎の助成限度額は、端数整理等もあり、個々に定める。

【助成事例の紹介】

平成二八年度に助成した事業で、既に実施報告書の提出のあったものを一部紹介します。

◇ 地域文化事業助成

「子ども科学出前教室」



「ドライアイス科学授業」風景

大阪市シルバードバイザー連絡協議会では、玉造小と中大江小の低学年を対象に出前教室「子ども科学教室」を開催し、ドライアイスの基礎的な科学を教えることで、科学に対する興味を高め、科学好きの人材の養成を図った。

(助成額八万円)

◇ 地域文化事業助成

「せんば鎮守の杜

音楽祭・芸術祭」

昨年一〇周年を迎え、今やすっかり秋の恒例イベントとなった「せんば鎮守の杜音楽祭・芸術祭」が坐摩(いかすり)神社の野外ステージで一〇月八日(土)に開催された。

昼の部の「音楽祭」では、地元の一四の音楽団体や文化団体による合唱「写真Ⅱ右」、器楽演奏、舞踊、詩吟など、芸術の香り高いコンサートが開催された。

夜の部の「芸術祭」では、グリム童話の名作「ヘンゼルとグレーテル」の日本語オペラ「写真Ⅱ左」がプロ声楽家により上演された。

助成額 音楽祭二〇万円
 芸術祭一〇万円



◇ 地域文化事業助成

船場まつり「講演と講談の会」

先の「せんば鎮守の杜音楽祭・芸術祭」と同様、設立二周年を迎えた淀屋研究会では、船場まつりの一環として一〇月八日綿業会館で「講演と講談の会」を開催した。

講演では、今回は趣向を変え、これまであまり語られてこなかった「淀屋」の文化人としての一面が紹介された。



「講演」風景

また、講談では、NHK大河ドラマ「真田丸」に因んで、『大坂の陣』真田幸村の戦い」が語られた。



「講演」風景

なお、設立二周年を迎えた淀屋研究会では、元大阪市長關淳一氏（現日本WHO協会理事長）を顧問に迎えた。

（助成額二〇万円）

◇ 地域文化事業助成

「北大江たそがれコンサート」

一〇月九日（日）からの一週間を「コンサートWeek」とし、地域に集まる楽器工房等に働きかけて、連日、各種音楽イベント等を催すとともに、最終日の一五日（土）には、北大江公園で周辺事業所が主催する野外ライブコンサー

トをリレー開催することにより、地域一帯の文化交流の輪を広げ、都心のコミュニティづくりに寄与した。

（助成額二〇万円）



「野外ライブコンサート」風景



「楽器工房等によるイベント」風景

◇ 地域まちづくり事業助成

「たまつくり盆踊り大会」

玉造地域では、長年にわたり毎年八月の第一土曜と日曜の二日間玉造小学校のグラウンドで盆踊り大会を開催している。



今年八月六日の初日は、河内音頭専門家の出演により女性のリードで踊りを盛り上げ、七日の二日目は楽しい抽選会が行われた。これにより、あらゆる世代間の交流が深まり、地域住民の親睦と融和が図られ、地域コミュニティが活性化された。

（助成金二〇万円）

おおさかべんおもしろこう 大阪弁面白考 — 大阪弁の副作用 —

俳優でエッセイストのわかぎるふ氏は、「大阪の男は中年になると『男のおばちゃん』になるといい、それは『大阪弁の副作用の一つ』で、『なんでも口にする文化がそれを培っている』と分析する。

確かに、開放性(知らない他人でも気楽に声をかける)・合理性(建前を嫌って本音を語る)・敏捷性(停滞・沈黙を嫌い素早く饒舌に喋る)の三つの特徴を持つ大阪弁で、長年ものを考え、自己表現し、人と接触し続けていると、男も中年になるとオバハン化するのであらう。

筆者は、自分のことを完全にオバハン化していると自覚しているが、逆に、大阪の女性も中年になると『女のオッサン』になりがちだが、それが何故なのかはよく分らない。ところで、大阪人は、この大阪弁の副作用を言い訳・弁解にも利用することができるといえる。

「抽象度の高いことを語り合うシン

ポジウムなどでは、関西弁を使わないうでほしい。その場の知的な空気が乱される。卑俗な言葉で場の気分を混乱させる手段として使うにいたっては論外。つつしんでほしい」とのたまう輩がいる。

「なあ、ぼちぼち、ホンマのこと言いな」

「ちやうちやう、そんなん嘘や」

などとやられると、高尚なことを語り合うシンポジウムでは、途端に勘が狂ってしまうのだから。

そこで、「論理的な喋り方はようせんし、抽象的なことなんかよう考えん」のは、大阪弁で育ったからと言いつつ、大阪弁の副作用で頭が悪いかからだ弁解するのである。

大阪人が、ドイツ語で「音の絵」(オノマトペ)と訳される擬声語・擬態語をよく使うのも、「大阪弁の副作用」である。

大阪人は、リズムよく喋るために、繰り返すことは好む傾向があり、「ぼちぼち・わけわけ・ちやうちやう・あかんあかん」などをよく使うのである。

とりわけ、自分のはやる感情にことばが追いつかなくなると擬声語・擬態語をよく使う。

『ガーツといって、ダーツとやって、バアーツといったれ』——

「ガーツ」は行為、「ダーツ」はその時間、「バアーツ」はその結果。大阪人同士はことばの強弱や響きでその意味が通じ合う。

大阪人が小さい「つ」を多用するの、大阪弁の副作用である。

自分の興奮が相手に伝わらないと「つ」を登場させ、「めつちやー」となる。これでも反応が鈍いと「つ」が増えて「めつつちやー」となる。これでも反応がないと今度は音量を上げて「めつつちやー」と再びトライする。当然「つ」の間は無音であるが、前後の音が大きいので「つ」が際立って、驚きを伝えてやろうという執念が伝わってくる。

大阪府はかつての摂津・河内・和泉という地域からなり、いずれも水に因む地名である。摂津は津(港)をおさめるの意味であり、河内は都のあった大和から見て淀川の内側をあらわし、和泉は当地から湧きだした清泉に由来する。そして、自治都市として栄えた堺は摂津と河内の境にあり、大坂(三郷)は摂津國に属した。



大きい「つ」を漢字で「津」と書くと「港」の意味があり、昔、大阪には「難波津」「住吉津」「渡辺津」と呼ばれた港があった。これらの津は人・物の交流の中心となり、難波(大坂)の地に繁栄をもたらした。だから、今でも地名に残り、大阪市民に親しまれている。

このように、大きい「つ」のまじりの住人であった大阪人は、今では「でかつ」「やばつ」「さぶつ」と小さい「つ」で感情の交信にため、会話を楽しんでいる。

(槇野 勝・記)

*このコラム欄への投稿を募ります。

テーマは「おおさか」です。一五〇〇字程度でお願いいたします。